

# 近代日本における建築展の展開

—建築誌掲載記事による編年作業から—

建築史・建築論研究室 根葉樹生

## 序章

### 0-1 研究背景と視座

建築物および建築家を主題とする展覧会のことをさす建築展は、これまでさまざまな主題で、規模で、場所で催されてきた。近年の建築展をみても、図面や模型、写真をもちいた資料展示的な性格をもったものから、プロジェクトマップや映像作品をもちいたインスタレーション的な性格をもったものなど、展示方法において多様化している。また、建築の主題においても、特定の建築家の作品を展示したものから、あるテーマのもとに建築物や建築家をあつめ展示するものなど、多様化している。これらのような変化の要因の一つとしては、建築展を建築分野における教育や専門家同士の発表、批評の場だけでなく、非専門の来場者の建築文化にふれる場としても利用する目的が発生したことなどが考えられる。そしてそのような目的は建築展をおこなう会場の規模や普段の利用者層によって大きく左右されるだろう。つまり、建築展は建築および建築家について公開するという行為の目的の変化とともに主題が多様化し、それに合わせて効果的な会場をさまざま選択してきたと考えられる。

以上のような視座にたち、本研究ではまず、建築展の形式や形態の多様さを明らかにするために、建築展と判断される事例を網羅的に研究の対象とした。そして、それらの建築展を年代ごとに定量的に評価することで、建築展が時間の流れの中で、いつ、なにが、どれだけ展開したかを明らかにする。このように網羅的に事例をあつめ、定量的に評価をすることで、時系列的な傾向をとらえ、その変遷の過程を示すことができると著者は考える。

### 0-2 既往研究

これまで建築展を扱った研究は特定の主題、特定の建築家に注目し、特定の展覧会を対象として、それらが開催される経緯と開催状況、その後の動向の詳細を新聞、雑誌、文献資料、書簡やヒアリングなどから明らかにすることで、同時代における建築展という活動の意義を位置付けている。例えば、北川佳子らは、イタリア合理主義建築展とそれに伴って結成された運動団体 MIAR を対象とし、結果的にはたった二回の開催で団体は解体することとなったが、解体を契機に運動の方向性をジャーナリズムへと向け、言語媒体という手段によってその勢力を拡大することへと繋がったことを明らかにしている。また、太田尚孝らは、ドイツの国際建築展を対象として、日本の都市再生施策への影響があるにも関わらず、その研究の蓄積が少ないことを指摘しながら、当建築展が歴史的発展の中で段階的に都市計画との関係性を深め、一時的で社会実験的な場であるという展覧会の特性をいかに、革新的な取り組みを行ってきたことを明らかにしている。ほかに、山崎泰寛らは、1950年代にニューヨーク近代美術館が企画した、ニューヨーク近代美術館の中庭に吉村順三の設計によって書院造りの「松風荘」を建設した実物展示「日本家屋展」と北米各地を巡回し日本の建築を紹介した写真展示「日本建築展」を対象とし、前者では、建設された松風荘を企画に関わった人々の要求を混ぜ込んだ唯一無二の作品だったとし、その企画に中心的に携わっていたキュレーターのアーサー

ドレクスラーの動向から、建築展におけるキュレーターの役割を明らかにしており、後者では、出展側である日本からの近代建築を紹介するという提案に対し、ニューヨーク近代美術館は古建築の紹介を目的としたことを指摘し、日米間の日本建築のありように関する齟齬を明らかにしている。

以上のような特定の展覧会を扱った研究では、対象の開催経緯やその後の動向を明らかにすることで、建築展に関わった人々の思想を読み取り、歴史研究に新たな知見を提示してきた。これらに対し、本研究をとおして建築展それ自体の展開の傾向と変遷を提示することは、既往の研究では見過ごされてきた同時代もしくは前後の時代での建築展という枠組みにおける、特定の各事例が建築展の展開の傾向と変遷のなかでの位置が明らかとなり、それぞれの活動それ自体の新規性や特異性を裏付けることができると著者は考える。

長い期間で大量に催されてきた展覧会を対象にするにあたり、展覧会についての既往の研究も把握する。過去の展覧会に関する情報を網羅的に収集する試みは博物館と美術館主導のもと精力的に行われており、その情報は公開されている。しかし、これらは博物館と美術館が主導のため、そのほかの会場でおこなわれた展覧会についての情報は対象としていない。そこで、その補完を目的とした研究として、志賀健二郎による百貨店の展覧会を対象とした研究があり、近代以降の日本の都市文化の形成において重要な存在であった百貨店を対象とし、そこでの展覧会の開催経緯と各展覧会の主題の変遷を明らかにし、文化の享受と消費、展覧会のあり方などを考える上での重要な視座を提示している。また、会場の制限なく明治期からの展覧会について収集を試みた事例として、『展覧会カタログ総覧』があげられるが、こちらも資料が美術館と博物館に収蔵されているカタログであるがゆえに、すべてを網羅したものとはいえない。

そこで、本研究では、建築展について網羅的に扱う研究として、建築誌『新建築』に掲載された広告と記事から建築展の情報を収集することを試みる。同誌はニュース欄をもうけ、当時の建築界の動向を紹介するとともに展覧会に関する情報を提示してきた。編集部の所員が変わりながら発刊されてきた雑誌から情報を集めるという方法をとる以上編集方針の変化による情報の偏りが考えられる点は留意しなければならないが、同一のメディア上の情報を扱うことで、少なくともそのメディア上の動向はつかむことができ、網羅的に通時的な研究の成果としては一定の有効性があると著者は考える。

### 0-3 研究目的

本研究では下記の4点を目的とする。

- ①『新建築』より可能な限り建築展に関する情報を収集し、建築展の編年史を作成する。
- ②①で得られた1174事例の主題と会場を類型化し、いつ、どの種類の建築展がどの種類の会場で何回行われていたかを明らかにする。
- ③②の結果から5年ごとの合計数を算出し、各種類の割合から年代別の傾向を明らかにする。
- ④③によって明らかになった年代別の傾向を比較することで、時系列

的な変遷を明らかにする。

#### 0-4 論文構成

1章では建築展の主題について、2章では建築展の会場について、それぞれ類型化し、得られた類型をもとに建築展を分類する。そして、それぞれの分類の結果から展覧会の数をグラフ化し定量的に分析することで、傾向とその変遷を示す。3章では、1章と2章で示した結果から得られた3つの論点について、傾向とその変遷が起きた背景を考察する。

#### 0-5 研究方法

建築誌『新建築』創刊年である1925年から2019年までに掲載された記事および広告より、建築展の情報（展覧会名、会期、会場）を可能な限り収集する。この時点で会場の記載のないものに関しては「不明」とした。これらの集められた建築展を掲載された年月号順に整理する。そして、主題を5つ（「作家展」「建物展」「都市展」「学生作品展」「設計競技案展」）、会場を5つ（「ギャラリー」「文化施設」「学校」「ショールーム」「その他」）に類型化し、時系列順に整理された建築展を分類する。各年のそれぞれの種類の絶対数から5年ごとの合計値を算出し、各5年間の種類の総数を100%として割合を示すグラフを作成することで、それらを比較し年代ごとの割合、傾向の変動を捉える。

3章については、同時代のほかの統計の変化や出来事から、建築展の傾向とその変遷の背景を考察する。

### 1章 主題の展開

本章では、対象期間において催された建築展の主題が時間の経過とともに展開し変遷したかをグラフの読み取りより明らかにする。そして、その変遷と転換点を抽出した。

#### 1-1 分類項目について

各展覧会での具体的な展示内容はさまざまだが、本研究では、建築展の主題の展開と傾向を把握するため、「作家展」「建物展」「都市展」「学生作品展」「設計競技案展」の5つの項目をもうけた。さらに、特徴がわかる「作家展」は、「個人」「団体」「複合」「企業」の4つの項目をもうけ、細分化した。各項目について下記に示す。

作家展とは、特定の建築家や設計事務所、建設会社といった設計主体を主題とした展覧会をさし、個人作家展は一人の建築家について、あるいはその建築家もしくは建築家ユニットで主催された設計事務所を主題としたもの、団体作家展は同じ団体や組合に所属する複数の建築家をその団体や組合でまとめて主題としたもの、複合作家展はある主題のもとに複数の建築家をあつめたもの、企業作家展は一つの企業を主題としたものをそれぞれさす。

建物展とは、建築家による特定の建築作品や、場所や時代といったある帰属性をもった複数の建築物、またはその部分などを主題とした展覧会をさす。

都市展とは、建築家による特定の都市計画や、都市やまちを題材とした作品、また都市を題材として記録的に撮られた写真などを主題とした展覧会をさす。

学生作品展とは、授業課題や卒業制作といった学生個人の作品にくわえ、研究室による研究成果や成果物など、学生が関わった成果物を主題とした展覧会をさす。

設計競技案展とは、公共建築の計画時に行われた公開および指名による設計競技へ応募された計画案、また、新建築社などの主催によるアイデアコンペへ応募された提案を主題とした展覧会をさす。

#### 1-2 割合からみる主題の変遷

本節では、前節でもうけた項目にもとづいて建築展の分類、5年ごとの数値の算出、グラフ化によって年代的な傾向の読み取りをおこない変遷を明らかにする。そして、その変遷と転換点を抽出した。

##### 1-2-1 全体

作家展と建物展の合計の割合が対象期間の全体をとおして、つねに50%以上の割合をしめていることから、建築展における主題として、それら2つに分類されるものがおもに企画されていることが明らかとなった。作家展の項目に着目すると、1925～1974年の期間でおもに30%前後の割合を占め続けているが、1950～1954年と1965～1969年のグラフにおいて例外的にそれぞれグラフの山と谷がみられる。1965～1979年の期間は急激な増加傾向がみられ、1975～2019年の期間は緩やかな増減の変動はあるものの約50%以上の割合を占め続けてい

	作家展				建物展	都市展	学生作品展	設計競技案展	合計	
	個人	団体	企業	複合						
1925~1929	5	0	5	0	0	3	0	3	0	11
1930~1934	2	1	1	0	0	2	1	1	1	6
1935~1939	3	0	3	0	0	3	1	5	0	12
1940~1944	1	1	0	0	0	3	0	0	0	4
1945~1949	3	0	3	0	0	4	2	1	0	10
1950~1954	8	1	7	0	0	2	0	2	1	13
1955~1959	11	0	10	0	1	13	1	10	1	36
1960~1964	5	3	2	0	0	5	1	3	2	15
1965~1969	2	2	0	0	0	14	4	0	3	23
1970~1974	15	13	2	0	0	20	5	0	2	38
1975~1979	35	33	0	1	1	19	4	2	7	64
1980~1984	45	38	0	1	6	31	5	5	6	85
1985~1989	48	36	1	1	10	37	8	4	3	90
1990~1994	84	64	1	4	15	34	10	1	5	123
1995~1999	92	77	3	2	10	55	14	6	4	155
2000~2004	68	54	0	7	7	40	11	3	1	108
2005~2009	93	75	1	8	9	37	11	6	2	137
2010~2014	79	56	1	8	14	38	3	15	1	123
2015~2019	72	49	0	10	13	38	8	12	0	120

表1 年代別主題一覧表

る。つまり、全体として主要な作家展と建物展のなかでも、1975～2019年の期間においては作家展が大きく割合を占め、建築展で主題とおもに扱われる傾向にあることが明らかとなった。なお、もう一つの主要な主題である建物展が作家展の割合を上回るのは1940～1949年と1960～1974年の期間だけである。都市展の項目に着目すると、1945～1949年のグラフにおいて対象期間全体でもっとも大きな割合を占めるが、1925～1949年の期間では断続的である。その後、1950～1954年のグラフにおいて0%となるが、1950～1964年の期間では緩やかな増加傾向であり、続く1965～1974年の期間ではグラフの山がみられる。以降の1975～2019年の期間では変動もなく割合として大きく占めることはないが、つねにグラフにあらわれていることより、1965～1969年の期間で注目されて以降つねに取り上げられる主題であることが明らかとなった。学生作品展に着目すると、1925～1964年の期間では、1940～1949年の期間を例外として、約15%以上の割合を占めている。しかし、1965～1974年の期間に0%となることを境に1975～2019年の期間ではあらわれるものの割合としては小さな値となっている。だが、近年にあたり2005～2014年の期間において比較的大きく増加していることがわかる。設計競技案展に着目すると、1930～1934年のグラフで例外的に大きな割合を占めるが、1950～1954年のグラフに再びその割合があらわれてからおもには1950～2014年の期間においてグラフにあらわれていることがわかる。そして1960～1969年の期間において小さなグラフの山がみられる一方で、1990年～2014年の期間においてなだらかに減少し、2015～2019年のグラフでは0%となっている。

以上の結果より、本研究では、作家展、都市展、設計競技案展にみられた傾向の変遷と転換点をそれぞれ case1～case3 として本論文 3 章での考察の対象とする。

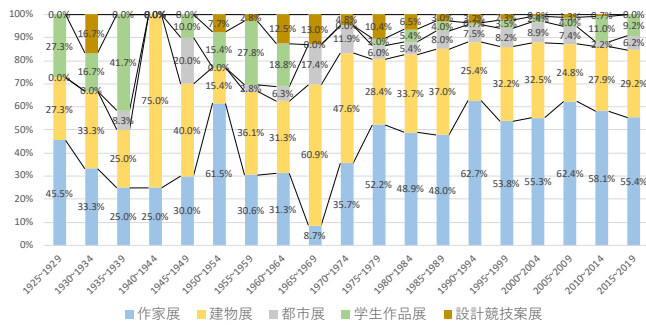


図1 年代別主題の割合

### 1-2-2 作家展

本項では、1965～1969年にグラフの谷がみられるものの、対象期間においてつねに、おもな主題として取り上げられている作家展について、作家展を特徴別に細分化したそれぞれの割合のグラフから、傾向を読み取り変遷を明らかにした。そして、その転換点を抽出した。

団体作家展に着目すると、1925～1959年の期間は大きく割合をしめるが、1955～1969年の期間で急激に減少する。その変動に連動するかたちで、同期間に個人作家展の割合が急激に増加する。さらに、1965～2019年の期間では団体作家展はほとんどグラフにあらわれることはなくなっており、個人作家展が作家展において主要な主題として扱

われていることが明らかとなった。複合作家展に着目すると、1955～1959年に例外的にグラフにあらわれるが、1975～1979年のグラフにふたたびあらわれて以降1975～2019年の期間においておもにあらわれる。1975～1989年の期間で増加し、1985～2009年の期間で減少するが、近年にあたり2005～2019年の期間においては増加傾向となっている。企業作家展に着目すると、1975～1979年のグラフではじめてあらわれており、1975～2019年の期間において、つねにあらわれ、なだらかに増加傾向が続いている。これらの結果を総合的にふまえると、1965～1979年の期間で増加し、大きく割合を占めるようになる作家展において、その内容は、1975年以降多様化し、その傾向がつついていることが明らかとなった。

以上の結果より、本研究では、個人作家展の傾向の変遷と転換点を本論文 3 章の case1 における考察の対象とする。

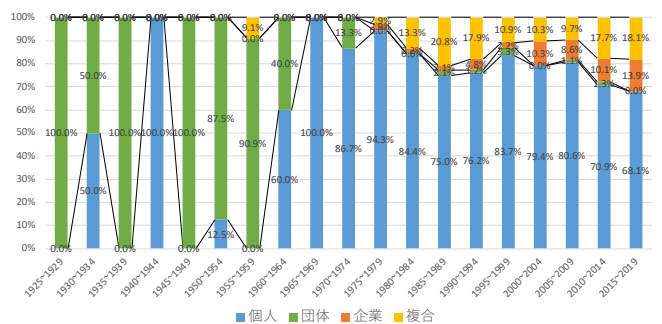


図2 年代別作家展特徴の割合

## 2 章 会場の展開

本章では、対象期間において催された建築展がどのような会場で開催され、時間の経過とともにどのように変遷したかをグラフの読み取りより明らかにする。また、前章の分類をもとに、特定の会場における主題の傾向と変遷を比較する。

### 2-1 分類項目について

各展覧会の具体的な展示会場はさまざまだが、本研究では、建築展に利用される会場の傾向と変遷を把握するため、「ギャラリー」「文化施設」「学校」「ショールーム」「その他」の5つの項目をもうけた。さらに、特徴がわかる「ギャラリー」は、「専門ギャラリー」「一般ギャラリー」の2つ、「文化施設」は、「専門文化施設」「美術館」「その他」の3つの項目をもうけ、細分化した。各項目について下記に示す。

ギャラリーとは、おもに常設の作品を所有せず、展覧会の企画のたびに出展者と作品をあつめ、一時的にそれらを展示する空間をさし、展示作品において建築またはインテリアに関するものに限定するという方針が存在するか否かによって、専門ギャラリーと一般ギャラリーに細分化している。

文化施設とは、資料や作品の保管、研究、そしてそれらの公開をとおして文化を普及することを目的とした施設に設置された展示空間をさし、ギャラリー同様に専門文化施設を、また例外的に頻出した美術館を取り出し、それらに含まれない博物館や会館をその他として細分化している。

学校とは、大学をおもとした教育機関の構内に設置された展示空間、

もしくはそれら機関により運営されている展示空間をさす。

ショールームとは、企業によって運営され、おもにその企業の製品を展示することを目的とした展示空間をさす。

その他とは、上記4つの項目のどれにも当てはまらない、公園やオフィスビルといった本来は展示の役割をもたない空間を会場とした事例をさす。

## 2-2 割合からみる会場の変遷

本節では、前節でもうけた項目にもとづいて建築展の分類、5年ごとの数値の算出、グラフ化による年代的な傾向の読み取りをおこない、変遷を明らかにした。なおその傾向の読み取りにおいて、グラフ中央に記された開催回数の絶対値を参照し、検討した。

### 2-2-1 全体

ギャラリーと文化施設の合計の割合が対象期間の全体をとおして、つねに50%以上を占めていることから、建築展が開催される会場として、それら2つに分類されるものが主要な会場として利用されることが明らかとなった。ギャラリーの項目に着目すると、1925～1934年の期間は、60%以上を占め、緩やかに割合が増加するが、1935～1939年のグラフにおいて急激に割合が減少する。しかし、この減少に関して絶対値をみると変動はなく、その割合の減少は学校の項目の増加によるものであることがわかる。1935～1949年の期間は、急激に割合が増加するが、1950～1954年のグラフにおいて再び急激に割合が減少する。しかしこの減少に関しても絶対値では1減少しただけであり、その割合の減少は文化施設の項目の増加によるものであることがわかる。1950～1979年の期間は30～50%の間で緩やかに変動するが、1960～1964年のグラフは例外であり、対象期間全体のなかでもっとも小さな割合となる。1975～1994年の期間は緩やかに割合が増加し、1980～2009年の期間は50%以上を占め、緩やかに変動する。しかし、1990～1994年のグラフを境に絶対値とともに減少傾向が続いている。文化施設の項目に着目すると、ギャラリーとともに割合の大半を占めるため、1935～1939年のグラフは例外だが、ギャラリーの増減に伴って変動している。その他の項目に着目すると、1950～1954年のグラフではじめてあらわれ、以降大きく割合を占めることはなく緩やかに変動し

ているが、つねにあらわれていることから、建築展が特殊な空間を利用する試みがなされ、会場が多様化し続けていることが明らかとなった。

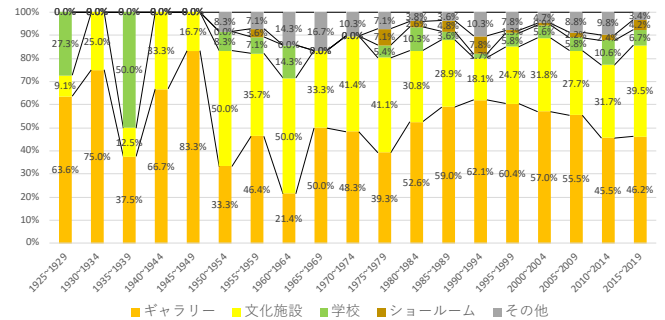


図3 年代別会場の割合

### 2-2-2 ギャラリー

本項では、対象期間の全体において、つねに会場として利用されてきたギャラリーについて、専門性を基準として細分化したそれぞれの割合のグラフから、傾向を読み取り、変遷を明らかにした。

専門ギャラリーの項目に着目すると、1980～1984年のグラフにはじめてあらわれ、1985～1989年のグラフで急増し、1985～2019年の期間では1990～1994年のグラフにおいて例外的にグラフの谷がみられるが、ギャラリーにおける割合の約50%以上をつねに占めるようになる。しかし、2005～2019年の期間では、絶対値とともに減少傾向が続いている。

一般ギャラリーについてさらに「百貨店およびショッピングセンター」に属するギャラリーの割合をグラフ化すると、百貨店およびショッピングセンターに属するギャラリーは1925～1974年の期間では、つねにギャラリー全体の50%以上をしめている。しかし、1960～1964年のグラフを境に1960～1979年の期間で急激な減少がみられ、1975～2009年の期間では緩やかになるが減少は続き、2010～2014年のグ

	ギャラリー		文化施設			学校	ショールーム	その他	不明	合計	合計-不明
	専門	一般	専門	美術館	その他						
1925-1929	7	0	7	1	0	1	3	0	0	11	11
1930-1934	3	0	3	1	1	0	0	0	0	6	4
1935-1939	3	0	3	1	0	1	4	0	0	12	8
1940-1944	2	0	2	1	0	1	0	0	0	4	3
1945-1949	5	0	5	1	0	1	0	0	0	10	6
1950-1954	4	0	4	6	0	0	1	0	0	13	12
1955-1959	13	0	13	10	2	1	2	1	1	36	28
1960-1964	3	0	3	7	0	4	2	0	0	15	14
1965-1969	9	0	9	6	4	0	2	0	0	23	18
1970-1974	14	0	14	12	9	0	0	0	0	35	29
1975-1979	22	0	22	23	16	3	4	4	0	65	56
1980-1984	41	3	38	24	11	5	8	2	2	85	78
1985-1989	49	29	20	24	4	13	7	3	4	90	83
1990-1994	72	33	39	21	4	15	2	2	9	122	116
1995-1999	93	55	38	38	16	16	6	2	1	155	154
2000-2004	61	35	26	34	13	17	4	1	1	108	107
2005-2009	76	44	32	38	5	28	5	3	0	137	137
2010-2014	56	30	26	39	6	24	9	3	1	124	123
2015-2019	55	27	28	47	15	23	9	5	1	120	119

表2 年代別会場一覧表

ラフ以降0%となっている。以上のことから、ギャラリーにおいては、大衆文化的な空間から、趣味嗜好的な空間へ、そして専門的な空間へと変遷していったことが明らかとなった。

り、建築を博物や美術などの視点から展示することが続けられていることが明らかとなった。さらに、このような傾向は前項のギャラリーでの専門化していく変遷とは逆の、非専門的な空間へと変遷しており、中でも美術として建築を展示する傾向にあることが明らかとなった。

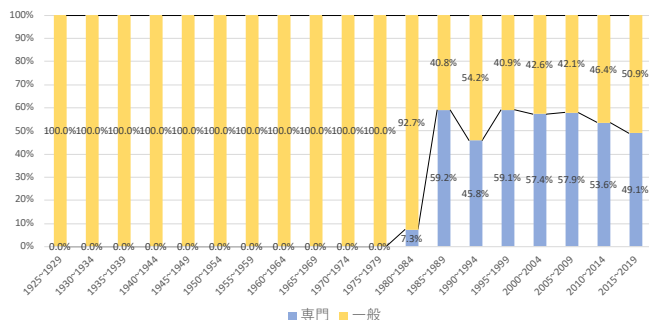


図4 年代別ギャラリー特徴の割合

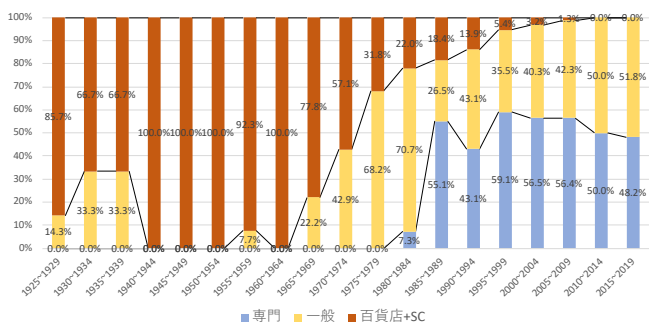


図5 年代別ギャラリー特徴の割合 (百貨店+S/C)

### 2-2-3 文化施設

本項では、前項同様に文化施設について、細分化したそれぞれの割合のグラフから、傾向を読み取り、変遷を明らかにした。

美術館の項目に着目すると、1950～1954年のグラフにおいてはじめてあらわれ、1950～1964年の期間は減少傾向でありつつも大きな割合をしめる。しかし、1965～1974年の期間はグラフにあらわれない。1975年～1979年のグラフで再びあらわれ、1975～1994年の期間は急激に増加する。2005～2019年の期間で減少傾向にあるなど変動があるものの1985～2019年の期間は全ての項目のなかでもっとも大きな割合を占め続けている。専門文化施設の項目に着目すると、1965～1969年のグラフで美術館の項目と入れ替わるようにならわれ、1965～1984年の期間において大きく割合を占める。しかし、1975～1989年の期間において急激に減少する。その後、1995～2004年の期間でグラフの山が見られるが、1985～2014年の期間では減少した割合のままが続いている。しかし、205～2019年の期間では緩やかにではあるが、増加傾向にある。その他の項目に着目すると1925～1949年の期間では大きな割合を占めているが、1950～1054年のグラフにおいて0%となっている。1955～1959年のグラフにおいて再びあらわれ、1960～1964年のグラフで40%を超える割合を占めるが、1960～2019年の期間で1980～1984年のグラフなどのように増加している例外はあるが、全体としては緩やかに減少傾向にある。以上の結果を総合的にふまえると、1930～1934年のグラフや1965～1979年の期間をのぞき、対象期間全体をとおして、つねに専門外の文化施設が50%以上を占めていることがわか

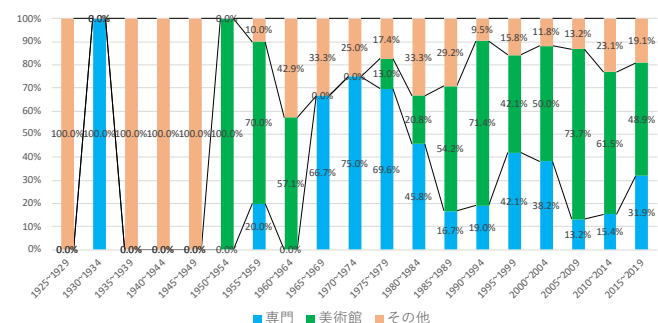


図6 年代別文化施設特徴の割合

### 2-3 主要会場における主題の変遷

本項では、ギャラリーと文化施設の割合が安定する1950年以降において、それぞれの会場での主題の変遷のグラフを比較し、傾向と特色を読み取る。

1955～1959年のグラフに着目すると、文化施設では一気に多様化しているが、一方のギャラリーでは主題に目立った変動はなく、同様に主題の多様化があらわれるのは20年ほど遅れた1975～1979年のグラフにおいてである。さらにこの20年ほどの遅れははじまりだけにあるのではなく、主題の多様化の波自体が文化施設からギャラリーに推移していることが1955～2004年の期間で比較することからわかる。しかし、2000～2019年の期間で比較をすると、各項目の割合に差はみられるものの、多様性という視点では大きな相違はなくなっていることがわかる。

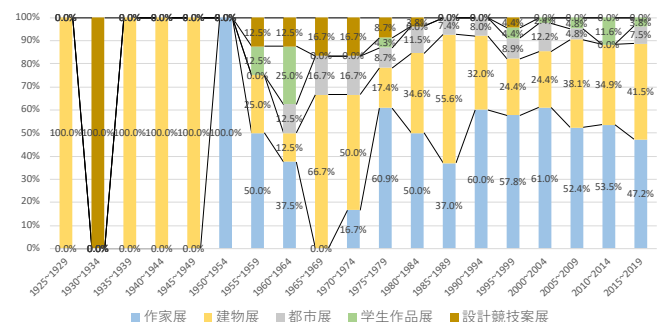


図7 年代別ギャラリーにおける主題の割合

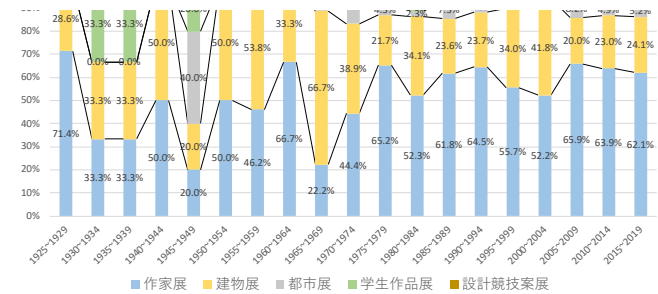


図8 年代別文化施設における主題の割合

### 3章 変遷過程における背景の考察

本章では、1章と2章の結果から得られた建築展の展開における特徴的な変遷と転換の発生の背景について、関連すると考えられる統計やそのグラフとの相関を示し、考察をおこなう。

#### 3-1 case1: 作家展にみる背景の考察-建築士法、建築士登録者数、住宅着工数の変化から

本節では、本論文1章の1-2-1と1-2-2の結果から得られた作家展の変遷における1960～1979年のグラフ転換と隆盛・衰退について、背景を考察する。背景としては、同時代におきた建築家を取り巻く環境の変化と国際的な行事から個人の建築家に対する関心が高まり、また住宅需要の拡大に伴う建築家による広報メディアとしての建築展の必要性が発生したことが考えられ、その点について、おもな同時代の出来事を把握し、新規登録建築士数と住宅着工数の変化と照合してみる。

1960～1979年における同時代的な出来事として、1950年の建築士法制定、1955年の日本設計監理協会UIA加盟、1960年の世界デザイン会議、1970年の大阪万博などがあげられる。一方、当期間の作家展および個人作家展の内容を具体的に確認すると、1960年のル・コルビュジェ展や1962年のフランク・ロイド・ライト展があげられ、以後1970年までは、海外の建築家の個人作家展がおこなわれている。1971年以降の個人作家展には日本人の建築家が登場し、1978年以降、日本人の建築家が個人作家展の大半をしめることになる。ここで、日本における新規登録建築士数と住宅着工数の推移を建築展の主題の変遷を示したグラフと重ねる。1964～1974年の期間において、二級建築士の新規登録者数が一級に対し、大幅に上回っているが、一級建築士の



図10 住宅着工数

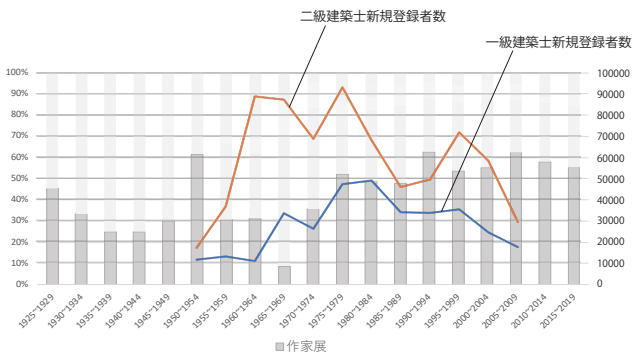


図9 一級、二級登録建築士数

新規登録者数も同じ期間で増加傾向にあることがわかる。さらに、住宅着工数も同じ期間で増加傾向にあることがわかる。これらのことより、作家展の対象となる建築士の増加に伴い、作家展が増加していることを示すグラフの相関が明らかとなり、なおかつその相関に住宅の需要の拡大も同様に相関がみられることが明らかとなった。しかし、1980年以降、建築士の増加数も、住宅着工数の増加傾向もみられなくなるものの、作家展の割合は緩やかな増加傾向がみられており、グラフの相関ははじめにだけ並行して増加するが、作家展の割合が50%に達して以降は、直接的な相関はみられない。

#### 3-2 case2: 都市展にみる背景の考察-『新建築』にみる論考の変化から

本節では、本論文2章の1-2-1の結果から得られた都市展の変遷における1965～1974年のグラフの山について、背景を考察する。背景としては、同時代の建築家が当期間において特に都市に対して関心をもっていたことが考えられ、その点について、既往研究をもとに『新建築』に寄稿された都市に関する論考の変化と照合してみる。

戦後に発行された『新建築』の中から建築家の都市に関する論考を収集し、通時的な推移を検討した奥山らの論文における論考の収集結果をもとに、『新建築』における1945～1989年の論考数の推移をグラフに示し、建築展の主題の変遷を示したグラフと重ねる。1965～1969年のグラフにおいて、都市に関する論考数は他のグラフの約2倍以上の数を示しており、頻りに議論されていることがわかる。同じ期間の都市展のグラフをみると、雑誌上の議論の盛り上がりに対応するかたちで、グラフの山があらわれており、その期間のグラフにおいて相関が見られることが明らかとなった。しかし、その後、変動は小さいものの再びあらわれる1980～1984年のグラフでは目立った相関はみられなかった。



図11 『新建築』における都市に関する論考数

#### 3-3 case3: 設計競技案展にみる背景の考察-設計競技の変化から

本節ではまず、本論文2章の1-2-1の結果から得られた設計競技案展の変遷における1950～1999年のグラフの隆盛と衰退について、背景を考察する。背景としては、同時代に設計競技の形式が変化したことと考えられ、その点について、既往研究をもとに設計競技形式の変化との照合から検証する。

1-2-1のグラフにみられる1960～1969年の隆盛について、国主権による日本三大設計競技のうちの一つである「国立劇場」と「京都国立国際会館」の設計競技案展が1963年に行われていることに着目する。

前者の国立劇場は、その計画自体が実現されるかをめぐって、専門家だけでなく、広く一般社会の関心を集めており、さらに、日本における公開設計競技史上初めて全応募作品展が企画された。後者の京都国際会館は、国立劇場と並行して行われ、日本の設計競技史上はじめて膨大な審査報告書が作成され、結果を公表し作品の展示会をおこなった。これら二つの重要な国家的設計競技の作品展が、以降 1999 年まで安定して行われる設計競技案展に対する一般社会の関心を高めた要因として考えられるのではないだろうか。

2000 年以降の設計競技案展の衰退について、建設省（当時）による 1991 年の建築審議会答申で示されたプロポーザル方式に着目する。1994 年以降、国は原則としてプロポーザル方式を採用し、各地方整備局へ運用改善と普及のための通達を行なっている。このプロポーザル方式とは、設計競技審査において、そこで提出された設計提案そのものを最終的な計画として扱うのではなく、実際の計画へのプロセスの中で、最終的に誰が計画を行ううえでプロジェクトに相応しいかを見極めるための審査という位置付けで利用されるものである。そのため、従来の設計競技のように建物の全体を細かく設計したものが応募されるのではなく、プロジェクトにおいて重要視される建築のソフト面の企画力をみせる作品が応募される。そのため、応募された作品を展示するという視点からこの変化をみると、建築のハード面を図面やドローイングとともに表現しているものに対して、建築のソフト面を表現しているものは、作品として展示するには困難な状況となっていると考えられる。そのため、今回明らかになったような、1990 年以降のグラフの減少傾向と相関していると言えるのではないだろうか。

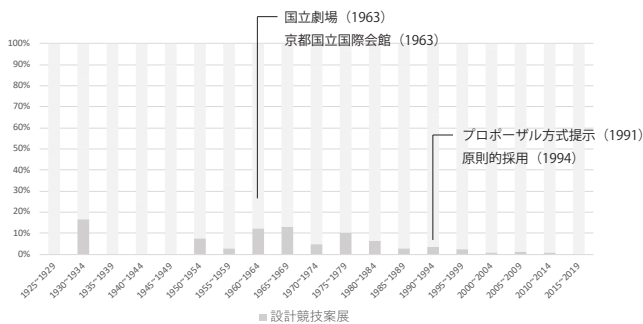


図 12 設計競技案展割合と周辺の出来事

## 結章

### 4-1 主題における傾向の変遷と多様化

主題において明らかとなったことを下記に示す。

- ①作家展と建物展に分類される主題が全てのグラフで 50%以上の割合を占めており、つねに主要な主題として取り上げられていることが明らかとなった。さらに、1975～2019 年の期間においては、作家展のみで 50%以上の割合を占めており、近年では特に作家展に分類される主題の建築展が頻繁に催されていることが明らかとなった。
- ②都市展に分類される主題の建築展は、1965～1969 年の同時代の関心に呼応する形でその割合に隆盛がみられ、その後、割合は減少するものの、絶対値は増加しており、つねに取り上げられる主題となっていることが明らかとなった。

③主題の変遷を多様性の視点からみると、近年に向かって設計競技案展が行われるといった逆行する変遷もみられるが、関わり方が多様化している学生の成果物を展示した学生作品展の 2000 年以降の増加傾向や、作家展における主題とする作家の多様化が 1975 年以降の複合作家展と企業作家展の増加傾向にみられ、建築展の主題は多様化し続けていることが明らかとなった。

### 4-2 会場における傾向の変遷と多様化

会場において明らかとなったことを下記に示す。

- ①ギャラリーと文化施設に分類される会場が全てのグラフで 50%以上の割合を占めており、つねに主要な会場として利用されていることが明らかとなった。
- ②主要な会場であるギャラリーと文化施設をそれぞれ専門性から細分化し比較した結果、ギャラリーでは専門化していくのに対し、文化施設は多様化していくという変遷の相違がみられた。
- ③会場の変遷を多様性の視点からみると 1975 年以降、割合に大小の差や増減はあるが、本研究で示した 5 つの項目すべてがつねにグラフにあらわれており、特に文化施設において、美術館、その他ともに 1990 年以降増加傾向にあることから、会場も主題と同様に多様化し続けていることが明らかとなった。

### 4-3 おわりに

本研究では、建築展について網羅的に情報を集めるにあたり、建築誌『新建築』を資料としてもちいた。そのため、集めた情報とそれによる本研究の成果について、『新建築』があくまでも、一つの商業誌であり、購読者のニーズや、販売促進のための考えなどさまざまな要求のもとに紙面情報の整理と編集がなされている点を十分に留意する必要があることを改めて強調する。つまり本研究の対象期間において、重要な意味をもつ建築展の事例を見逃してしまっている可能性は考えられる。また、1925～1974 年の期間の情報において、その絶対数が割合の詳細な検討に対して十分とはいえない値であることも本研究の課題として挙げられ、資料の限界と考える。しかし、5 年を一つの年代として区切り、定量的に示した各年代の割合を評価するという手法によって、通時的な傾向とその変遷を捉えるという目的において、妥当性を担保できたのではないだろうか。

### 参考文献

- 1) 北川佳子、入江正之「イタリア合理主義建築展とそれに伴う MIAR (Movimento Italiano per l' Architettura Razionale) の活動について-イタリア合理主義建築に関する研究 その 1-(『日本建築学会計画系論文集』第 548 号 pp285-291、2001)
- 2) 太田尚孝、エルファディング・ズザンネ、大村謙二郎、有田智一、藤井さやか「ドイツの都市計画における国際建築展 (IBA) の役割と存在意義に関する研究-IBA の歴史的発展と現代的位置づけに注目して-」(『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集』Vol.47 No.3、2012)
- 3) 山崎泰寛、松隈洋「ニューヨーク近代美術館『日本家屋展』に見るキュレーターの役割-アーサー・ドレクスラーの仕事を中心に-」(『日本建築学会計画系論文集』第 78 巻 第 688 号 pp1441-1446、2013)
- 4) 山崎泰寛、松隈洋「ニューヨーク近代美術館『日本建築展』に見る日米の日本建築観の差異-1950 年代における構図-」(『日本建築学会計画系論文集』第 78 巻 第 691 号 pp2077-2082、2013)
- 5) 国立新美術館『日本の美術展覧会記録 1945-2005』

([www.nact.jp/exhibitions1945-2005/index.html](http://www.nact.jp/exhibitions1945-2005/index.html))

- 6) 志賀健二郎『百貨店の展覧会-昭和のみせもの 1945-1988』(株式会社筑摩書房、2018)
- 7) 志賀健二郎『小田急百貨店の展覧会-新宿西口の戦後 50 年』(株式会社筑摩書房、2022)
- 8) 東京国立近代美術館、横浜美術館、国立西洋美術館、東京都写真美術館、東京国立博物館、東京都江戸東京博物館、日外アソシエーツ株式会社『展覧会カタログ総覧』(日外アソシエーツ 2009)
- 9) 新建築社『新建築』(株式会社新建築社、1925-1944, 1946-2019)
- 10) 日本建築学会『近代日本建築学発達史』(丸善株式会社、1972)
- 11) 建設省調査統計課『建設統計要覧』(国土交通省総合政策局、1970-2008)
- 12) 速水清孝『建築家と建築士-法と住宅をめぐる百年-』(東京大学出版会、2011)
- 13) 奥山信一、斉藤千尋、坂本一成「戦後『新建築』誌にみられた建築家の都市観 建築家の住宅論・都市論に関する研究」(日本建築学会計画系論文報告集 第 444 号 pp49-59、1993)
- 14) 近江榮『建築設計競技 コンペティションの系譜と展望』(鹿島出版会、1986)